
私という名の枷、あなたという名の檻

桐龍朱音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私という名の枷、あなたという名の檻

【Nコード】

N5007K

【作者名】

桐龍朱音

【あらすじ】

幼い頃に交わした約束。時がたてばきつとあなたは忘れてしまうのだと思っていた。なのにあなたは今でもその約束を守ってくれている。あの約束が、私という存在が、あなたにとっての枷となってしまう…。ずっと気がつかなくてごめんなさい。でも、安心して。もうすぐ私という名の枷からあなたを解き放つことができるから――過去に捕らわれた自分から彼を解放してあげたい彼女。そんな彼女を自分の世界に閉じ込めておきたい彼。すれちがいが生み出す恋愛物語です。

幼い約束

『お願いだからそんなこと言わないで』

涙が枯れ果てるほど泣いた。
声が掠れるほど叫んだ。
どうにかして目の前の地獄から逃げ出したいくて、
できることは何でもやってみた。

『そんな……死ぬなんて言葉、二度と言わないで』

だっしょうがないじゃない。

泣いて叫んで、狂ったように笑って。

色々やってみたけど、結局どれもダメだったんだから。

あとはもう死ぬことぐらいしかこの地獄から逃げ出せる方法なんてないでしょ？

『もし、どうしても死ぬっていうなら僕も一緒に死ぬ』

眩かれたその言葉に弾けるようにして振り返る。

久しぶりにこの瞳に映した彼は今まで見たことが無いほど悲痛な顔をしていた。

僅かな間の後、そんな顔をさせているのが自分なのだと気がついて、また死にたくなった。

だから衝動的に目の前にある屋上のフェンスに足を掛けた。

『ちづッ！！』

少年とは思えぬものすごい力で後ろから抱きかかえるようにしてフェンスから引き離される。

耳元に彼の僅かにあがった熱い息がかかる。
掌から消えていくフェンスの堅い感触に、もう少しで死ねたのにとぼんやり思った。

『死ぬなんてバカなことするなッ！！』

振り向かされ、目の前に迫った彼の顔はものすごく怒っていた。
私よりも一つ年上で、いつも穏やかに微笑んでいる優しい彼。
生まれたときからずっと傍にいたのに、声を荒げこんなに怖い顔をする事ができるなんて今まで知らなかった。

『こんな、こんなバカな真似…もう二度としないでくれよ……』

痛いくらい強く抱きしめられる。
そうされて初めて気がつくこと。
耳元で囁かれる彼の声が、私を抱きしめる両腕が、微かに震えている。

『ちづは僕に死んでほしいの？』

唐突とも言えるその言葉に、一瞬思考が止まる。
そしてさっき彼が言っていたことを思い出す。
私が死んだら彼も死ぬと言う、その言葉を。

『死んでほしいの?』

再度問われたその問いに、私は激しく首を振り否定する。
彼に死んでほしいなんてそんなこと思うわけが無い。
だって彼は大好きで大切なかけがえのない人なのだから。

『なら、死のうとなんてしないで』

私を抱きしめる腕が熱い。
私に囁きかける声が熱い。
冷え切った私の体を彼の熱が温めていく。

『ちづが死んだら、僕は生きていけない』

そんなことあるわけない。

あなたはとても綺麗な顔をしていて、すごく頭もよくて、運動神経も抜群で。

顔も頭のよさも平凡でものすごく不器用な私と違って、何をやらせても難なくできてしまうあなたはいつも人の中心で輝いている。

そんな人が私が死ぬ程度で生きていけなくなるなんて、そんなことあるわけがないのだ。

なのに――……

『生きていけないんだ……』

その腕があまりにも強く私を抱きしめるから。

その声が迷い子のようにあまりにも切ないから。

私が死んでもあなたは生きていけるでしょう、なんてこと言えなかった。

『お願いだよ、ちづ。もう自分から死のうとなんてしないで。そんなバカな言葉や考えなんてもう捨てて』

肩を掴まれ、優しく体を彼から引き離される。
目の前に現れた彼の顔はひどく真面目で。
栗色の綺麗な瞳が強い光を放ちながら私を見つめていた。

『僕がずっと傍にいるから』

形のいい唇から零れた真摯な言葉。
まだあどけなさを残した彼の顔がとても大人びて見えた。
目の前にいるのは少年ではなくて一人の男なのだと思わせるような、
そんな顔。

『ちづを一人ぼっちになんてしないから』

目頭が熱くなつて何かが頬に零れおちる。

そつと頬に当てた指先が僅かに濡れて光っていた。

とつくに涙なんて枯れ果てたと思っていたのに。

ああ、私はまだ泣けるのだ、とそう思った。

『悲しい思いも寂しい思いも二度とさせないようにするから』

泣いていると自覚した途端、涙は止めどなく溢れだす。

滲んだ視界の中で彼が微かに笑ったような気がして、その笑みのあまりの優しさに噛みしめた唇の隙間から嗚咽が漏れた。

『だから、ずっと僕と一緒に生きて』

温かな体温に包まれて。
静かな声に宥められて。

幼くも力強い彼の両腕の中はとても優しい世界だった。
私を取り囲む地獄は無くなったりしないはずなのに、まだ死にたい
と思う気持ちは確かにあるはずなのに、それでもこの世界があるの
ならば生きていけると思えるような、それほどに優しい世界だった。

——うん。私、あおくと生きる……

昔、交わした約束。

あの時、自分のことで精一杯だった私は気がつかなかった。

この約束のせいで、私が彼の枷となって後の彼の人生を縛り付けて
しまうことになるなんて。

もう少しだけ

「ちづ」

低く優しい声に呼ばれ、目を覚ます。
寝起きのぼんやりとした瞳に映るは、見慣れた端正な顔。
ほんといつ見ても女の私より綺麗な顔してて羨ましい…。

「こんなところで寝てたら風邪ひくぞ」

「…うん」

起き上がろうと体に力を入れてみたけど、上手くいかなかった。
何だかすごく眠いのだ。
今もすでに夢の中に片足突っ込んでる感じだし…。

「寝たりないのか、ちづ？」

「ん…」

「しょうがないな」

密やかな笑い声と共に、体が持ち上げられる。
優しい体温。
心地よい揺れ。
慣れ親しんだ、大好きな世界。

「人に運ばせといて何笑ってんだ、コイツめ」

責めるような言葉と裏腹に声は何処までも優しい。
だからいつも甘えてしまうのだ。
もう少しだけ我儘を言ってもいいんじゃないかって。

——もう少し、もう少しだけ………

「立花くんッ!」

夢と現実の狭間らへんにあつた意識が、突然聞こえてきた甲高く鋭い声に覚醒させられる。

驚いて目をパチパチさせていると、頭上から小さな溜息が聞こえた。見上げるといつもは柔和な表情を浮かべている端正な顔が、少し苛立たしげに歪められていた。

私と目が合うとすぐにその苛立たしげな表情は消え、苦笑のような

ものに変わった。

「まだ話は終わってないわ！」

再び聞こえてきた甲高い声に、彼は首だけで後ろに振り返った。どうやら甲高い声の主は彼の背後にいたらしい。そう気がつけば何処となく不穏な空気がそちらから感じられる。

「俺はもう終わったんだと思ってたけど」

「私は終えたつもりはないの！」

「これ以上何を話すって言うのさ？」

「だって、あんな理由じゃ納得できない…！」

「あんたが納得できる、できないの問題じゃないし」

「でも、私は別れたくないッ！」

唐突に繰り広げられた言葉の応酬に、寝起きの私の頭はプチパニツク状態だった。

けどそれも少しの間で、すぐにどうやら私は今、俗に言う修羅場というものに居合わせてしまっているのだと気がついた。

……って、ちょっと待って！だとしたら今のこの状況はまずいんじゃない……！

修羅場を繰り広げる男と女。

その男の方に私は現在、お姫様だっこをされている状態だ。これはまずい。

普通に考えてまず過ぎる。

「あ、あおくんッ！」

慌て過ぎて声が上ずってしまった。
うう、恥ずかしい…。

「どうかした、ちづ？」

私の方へ向けた彼の顔も声もいつものように優しくかった。
なのに背後の女の人にはどこことなくそっけないような態度をとるのは何故だろうと思った。

声だって普段より冷たい気がするし、言い方にも棘がある。

断片的な話の内容からして背後の女の方は私を抱き上げている男――
――あおくんの彼女であるような気がするんだけど…。

「今すぐ降ろしてっ！」

「どうして？」

「どうしてって…後ろの人、彼女さんでしょ？こんなの見たら誤解されちゃ——」

「彼女じゃないよ」

満面の笑みで告げられたその言葉に、「ふえ？」と間拔けな声を上げてしまった。

いやいや、どう考えても彼女さんでしょ？

別れたくないと言ってたし。

「だけど——」

「その子のせいなの？」

どう考えても嘘をついているあおくんにさらに言い募ろうとした私の声は、低く鋭い声に阻まれてしまった。

びっくりして、首を伸ばし声が聞こえてきたあおくんの背後を見ると、怒りに燃えた瞳と目が合ってしまった。

もしかしくなくても、さっきの低い声はついさっきまで甲高い声を上げていた彼女のものだろう。

同じ声帯からこうも違う声が出るなんて、驚きだ。

「その子がいるから、私と別れるっていうの？」

丁寧な巻かれた赤みがかった長い茶色の髪。

薄くメイクが施された綺麗な顔。

長い手足、細い腰、豊満な胸、といった抜群のプロポーション。

——あ…この人、美人で有名な麗華先輩だ…。

怒りに歪む綺麗な顔の迫力がすごくて、すぐには気がつかなかったけど、ものすごい視線で私を睨むその人は間違いなく私の一つ上、あおくんと同じ年の白鳥麗華先輩だ。

確か人気雑誌のモデルをしているという、有名な先輩。そんな有名な先輩があおくんの彼女だったなんて…。いや、あおくんもかなりの有名人なんだけど。

「そうだって言ったら？」

「なッ…！」

「あおくん！？」

あおくんの顔を見上げれば、すでに彼は私の方を見ていなかった。あおくんは絶句という言葉がぴったりな顔で彼を見つめている麗華先輩の方を見ていた。

「とにかく、お前とはもう終わったんだ。そろそろ帰らせてくれない？日も暮れて寒くなってきたし、このまま此处でお前の話を聞き続けてちづが風邪ひいたら困る」

「そんなっ！」

「じゃーな、白鳥」

一方的に話を切り上げてあおくんは校舎に向かって歩き出す。

刺々しい視線を感じながらも、彼にお姫様だっこされている私も一緒に遠ざかっていくしかない。

一人佇む麗華先輩への申し訳なさに心が痛む。

「あおくん、あんな言い方よくないよ。早く戻って麗華先輩の話を聞いてあげたほうが…」

「アイツとはちゃんと別れ話をしてもう終わりにしたんだ。なのにしつこく付きまどってくる方が悪い」

「終わりにしたって……でも、麗華先輩納得してないみたいだよ？

もう一度話し合ったほうがいいと思うんだけど…」

「アイツと話し合うことなんてもうない。それよりも、こんな真冬に中庭で眠ってたならダメじゃないか。体が冷え切ってる」

「昨日夜遅くまでりっちゃんから借りてた本を読んだから寝不足でつい……」って、話を逸らさないでよ、あおくん！」

「鞆は教室だろう？とってきてやるからちょっと此処で待ってて」

いつの間にやら辿り着いた昇降口でようやくお姫様だっこから解放され、ほっと息をつく。

あおくんには昔からよくお姫さまだっこをしてもらっているから、ぶっちゃんに慣れていると言えは慣れているんだけど、学校でされるとやっぱり恥ずかしい。

何よりも、あおくんのファンの方々からの視線が痛いのだ。

今は放課後で人もあまりいないからまだマシだけど。

「ああ、もうっ、そうじゃなくてっ！あおくん、私の話聞いている？
麗華先輩のところへ——」

「そこから動くなよ、ちづ。間違っても一人で帰ろうとするなよ？

お前はものすごいドジで虚弱体質なんだから、俺が傍にいない時は大人しくしてるのが一番だ」

「た、確かにその通りだけど！でも、私は一人で帰れるから！だから麗華先輩の——」

「一人で帰れる？バカなこと言うなよ、ちづ。ただでさえ今日はあんな寒いところで寝てたんだ。帰る途中で具合が悪くなったらどうする？」

「大丈夫だもんっ！私何もできないほど子供じゃないよ？あおくんが傍にいらなくても——」

「ちづ」

力強い声に、思わずびくりと方が震える。

木漏れ日のような栗色の瞳に真っ直ぐ見つめられ、思わず頬が熱くなる。

あんなに綺麗な瞳に見つめられたら、誰だって同じ反応をするだろう。

「いい子で待ってるよ？」

キラキラと輝く満面の笑顔。

まるで漫画のように後ろに花が咲いていてもおかしくないほど完璧な笑顔だ。

傍^{はた}から見たらその美しさに惚けてしまいかもしれないけど、私はこの笑顔がそんな素敵なものじゃないことをよく知っている。

これは、有無を言わせず他人を丸めこむ笑顔だ。

「あおくん……」

この笑顔が出てしまえば、何を言ってもあおくんは聞き入れてくれない。

諦めて溜息をつく私を見てもう一度笑みを浮かべると、あおくんは

校舎の中へ入って行った。
その背中を見つめながら、私は申し訳なさではち切れそうになる胸を抑えた。

「ごめんなさい……」

私が、いるから。
私という存在が傍にいますから。
あおくんは幼いあの約束に今も縛り付けられている。

『あんたがいるから、葵は誰とも恋愛ができないのよっ!』

蘇る、一年前の記憶。
投げつけられた衝撃の言葉。

自分がいかに鈍感だったかを思い知らされたあの日。

『あんたさえ、あんたさえいなければ…！』

彼女ができてもうすぐに別れてしまうあおくん。

あおくんには振られて泣いている可愛い彼女達。

振られると分っているから告白しないで思い続ける、あの子。

彼らをそんな風にしてしまっているのが自分なのだと、愚かにもや
っと気がついた。

「いじめんなさい…」

謝つてすむ話ではないけれど。
それでも口から出るのはこの言葉。

「うめんなさい…」

本当はすぐにも傍を離れた方がいいことは分かっている。
でも、あと一年と数ヶ月。
それだけたてば、私は完全にあおくんの傍を離れることができる。
誰にも何の迷惑もかけずに、離れることができるのだ。

——我儘でごめんなさい……けど、それ以上は何も望まないから。
ら。

だから、それまではどうか傍にいさせて。
あの優しい世界にもう少しだけ寄り添わせて。

———
そしたら………

あの人を、大好きなあの人を私という枷から解き放つことができる
から。

もう少しだけ（後書き）

帰り道

「ちづ、おまたせ」

背後から聞こえたあお君の声。

その優しい声に、過去のことを思い出していたせいで涙腺が緩んでいたこともあって思わず声をあげて泣き出しそうになってしまった。漏れそうになった嗚咽を、唇を噛みしめることでなんとか耐える。

「ちづ？」

返事を返さない私を不思議に思ったのか、あおくんが背後から覗き込むようにして私の顔をうかがう。
慌てて顔を横にそむけたけど、きつと見られてしまっただろう。
今にも泣きそうな、情けないわたしの顔を。

「……どうしたんだ？俺がいない間に誰かに何かされたのか？」

静かなその問いかけに答えなかったけれど、今ここで口を開いたら本格的に泣いてしまうと思ったので、ふるふると頭を振り否定の意を表した。

「じゃあ、何で泣きそうな顔してるんだよ？」

思わずあなたが優しすぎるせいだよ、と言いつつになった。

周りの人に迷惑をかけることしかできない私みたいな存在を、あなたの枷にしなければならないこの存在を、嫌な顔一つしないでいつも守ってくれる。

そんなあなたの優しさが「死にぞこない」の私にはもったいなくて、けどとても嬉しくて。

もうすぐ手放さなければならないと分かっているのに、手放したくないと思ってしまう。

そんな浅ましい自分が、嫌で嫌でどうしようもなくて。

だからあなたに優しくされる度、私は泣きたくなくなってしまふの。

「……泣きそうな顔なんてしてないよ。もうすぐ定期テストがあるでしょ？私、数学が苦手だからそのこと考えてたらちよつと憂鬱になつてただけ」

泣きたい衝動を何とか抑えられたので、小さな声で偽りの答えを口にする。

本当のことなんて言えるわけがない。

言ってしまうば、あおくんは私の浅ましさをさえその優しさで包んでしまう。

そんなこと、枷にしかねない私に許されることじゃない。

だから無理にでも笑顔をつくって、私は嘘をつく。

それが見え透いた嘘であっても、これ以上あおくんの枷にならないためにはこうするより他に方法が思いつかないから。

「……そうか」

私の見え透いた嘘をあおくんは何も言わずに受け止めてくれる。

いつだってどう考えても嘘だと分るような私の言葉を、あおくんはそのまま信じてくれる。

本当は嘘だって分かっているだろうに、問いただすこともなく嘘を本当として受け入れてくれるのだ。

「ちづは他の科目はよくできるのに、数学だけはまるっきりダメだからなー」

今までの暗く沈んでいた雰囲気打ち消すかのように、あおくんが
明るい声で私の嘘に話を合わせる。
その優しさにまた少し切なくなっただけ、それ以上にさっきの話
からそれたことにほっとした。

「数学だけはどうしても苦手なんだよね。あおくん、またテスト前
に教えてくれる？」

「もちろん」

茶目つ気たつぷりに笑顔で返事をしてくれたあおくんにつられて、
私も小さく笑って見せる。
心からの笑顔とは言えないけれど、さっき作った無理やりの笑顔よ
りはだいぶマシだと思う。

「よし。そうと決まれば早く帰って数学の勉強するぞ」

「今日から始めるの！？テストまでまだあと三週間もあるのに……」

「あと三週間じゃなくても、もう三週間だろ？苦手なら早いうちからやるに越したことはないぞ」

「そうだけど……」

「ほら、こねてないでさっさと帰るぞ」

目の前に差し出されたあおくんの大きな手。

そつとその手を握れば、優しくもしっかりと握り返される。

細く器用そうな指をもったその手は一見すると女の人のように繊細で綺麗だけれど、触れてみればゴツゴツと骨ばっていて男の人の手なのだと実感する。

「もう小さい子供じゃないんだから、手を繋いで帰ることもないのに。こんなことしてるからいつも彼女さんに誤解されちゃうんだよ。それに私とあおくんが実は恋人同士だとかいう噂も学校に流れたり

してるんだから……」

幼いころから幾度となく繋いできたあおくんの手。

同じ大きさだった手はいつの頃からか私の手をすっぽりと包めるほど大きくなっていった。

もう昔のように気軽に繋いではいけないと思うその手を、いつだって私は拒むことができない。

差し出されれば握り返してしまうし、差し出されなければ心で追いかけてしまう。

口では拒絶の言葉を言いながら、やっている行動はまったくの逆。本当に私はダメな人間だ。

「誤解されようが噂されようが関係ないね」

ぎゅっと痛いほど強く握られて、思わず顔を上げる。

鋭い光を浮かべたあおくんの瞳が私を見降ろすようにして見つめていた。

「繋いでいないと、ちづは一人で何処かへ行っちゃいそうだから」

どくり、と心臓が大きく脈打つ。

何もかも見透かされているような気がした。

過去のことはもちろんのこと、この先の未来で私があおくんの傍から姿を消そうとしていることも全部。

「……な、何言ってるのあおくん。私、通学路で迷子になるほど方向音痴じゃないよ？」

笑顔を浮かべ、明るく茶化す。

どうか見透かされませんように、と祈りながら。

「……そうだな。さすがに通学路では迷わないか」

「そうだよ。あおくんたら心配性なんだから」

「誰かさんがいつもこっちを心配させるようなことをするからな。猫を追っかけて遠くまで行って帰り道が分らなくなったって電話してきたり、ぼんやり歩いてたせいで電信柱に思いつきりぶつかって痛さのあまり泣きだしたり……まったく、いつまでたっても手のかかるお子様だよなあ、ちづは」

「そ、それはっ！」

身に覚えのある恥ずかしいエピソードを前に口籠る私を見て、あおくんが声をあげて笑いだす。

あからさまに笑われたことに少しむっ、としながらもとりあえず見透かされなかったことにほっとした。

あおくんのあの言葉には深い意味は無かったのかもしれないけれど、あおくんは驚くほど勘の鋭い人だからささいなことにも気を付けなきゃならない。

それに加えて私は嘘をつくのがあまり上手い方じゃないから尚更気を付けないと思わぬところでボロが出てしまうのだ。

「……あおくん、笑い過ぎ」

「くくっ…悪い。でも、思い出したらおかしくって…っ！」

あおくんの笑顔は太陽のようだといつも思う。

キラキラと眩しいほど輝いて傍に居る人すべてを魅了し、幸せにしてくれる。

そんな彼の笑顔が私は大好きだ。

だからいつもこうして笑っていてほしいと思う。

間違っても私がこの素敵な笑顔を奪ってはいけない。

「あーあ、よく笑った」

私は拗ねたふりをしながらあおくんの笑顔をしつかりと目に焼き付けた。

私が彼といられるのはあと1年と数ヶ月。

それまでにできるだけたくさんの彼の表情や姿を目に焼き付け、思い出として心に残していこうと思う。

あおくんから離れれば弱い私にはきつと挫けそうになる時がやってくるはず。

最悪、彼のもとへと戻ろうとしてしまいかもしれない。

でもそんなことは絶対にダメ。

だから思い出が必要なのだ。

辛い時、苦しい時、寂しい時。

彼自身に縋らないようにするために。

思い出に縋れるようにするために。

「思いっきり笑ったら、何だか腹がへってきたな。早く帰ろう、ちづ」

「うん」

優しい笑顔。

低く落ち着いた声。

大きな手の温もり。

全部全部、
忘れない。

『ただいま』

「ただいま」

手を繋いで帰り着いたのはあおくんの家。
広い玄関から奥に続く廊下にあおくんの声が静かに響く。
だけどそれに応える声はなく、家の中は暗く静まり返っていた。

「陽菜さん、また籠もってるの？」

陽菜さんとは、あおくんのお母さん。

彼女は売れっ子の恋愛作家さんであって、よく仕事部屋に籠もっている。

その状態になると、仕事が一区切りするまで絶対にそこからは出てこない。

「三日前くらい前から籠もってるからそろそろ出てくるとは思っけどな」

そう言いながら玄関を上がり、廊下の電気をつけていくあおくん。その姿をぼんやりと見ていると、訝しげな顔であおくんがこちらを振り返った。

「ちづ、何してんだ？早く上がれよ」

「え…？ああ、うん！お邪魔します・・・」

ぼんやりしすぎたと慌てながらも、靴をそろえて玄関を上げる。
あわあわしながらもおおくんの元に辿り着いてその顔を見上げると、
おおくんの顔はひどく不機嫌そうに歪められていた。

——ああ、私かのろまだからイライラさせちゃったのかな・・・

自分で思い立ったおおくんの不機嫌さの理由に、自分で落ち込む。
私はどうしてこうも迷惑しかかけられないのだろう。
つくづく自分が嫌になる。

「あの、おおくん——」

「何で『お邪魔します』なの？」

とりあえず謝ろうとした私の声は、あおくんの不機嫌さ丸出しの声に遮られた。

予想してなかったそのタイミングと言葉の内容に、一瞬何を言われたのか分からなかった。

「え……？」

「だから、何で『ただいま』じゃなくて『お邪魔します』なの？」

『ただいま』っていうのは自分の居場所に帰ってきた時に言う言葉。ここはあおくんの家であって私の家ではない。

つまり、私の居場所ではないのだ。

だから『ただいま』って言うのはおかしいはず…。

「だ、だって、ここは私の家じゃないし…」

思いがけないあおくんの言葉に、戸惑いつつも返事を返そうとする私を見て、あおくんは盛大な溜息を漏らした。

心の底から呆れたというようなその溜息に、体に緊張が走った。

——ど、どうしよう…！また何か気に障ること言った…！？

何をしようとも。

何を考えようとも。

「私」という存在はあおくんの枷にしかない。

そんな私が彼に嫌われることなんて、当たり前で仕方のないことなのに。

それをひどく恐れているなんて……

——こんなこと思っちゃダメ……！私はあおくんから離れるって決めるんだから……！

強くならなくちゃいけない。
自分自身のためにも、そして何よりもあおくんのために。
一人で生きていくと決めたのだから。

「ちづ、お前が毎日うちに通うようになったもつう5年経つんだぞ？」

ぼん、と頭に乗せられた大きな手と優しく響く声に我に返る。

知らず知らず俯いていた顔を上げると、どこか困ったような顔をしたらあおくと視線が合った。

「それだけうちに通ってたら、ここはもうお前の家だろ」

その言葉に、胸がきゅーっと痛む。

飛び上がりそうなくらい、嬉しい言葉。
けど、これから先ここから離れることを考えたら聞いてはいけなかった言葉。

「だからうちに上がる時は『お邪魔します』じゃなくて『ただいま』だろ。ずっと気になってたんだよな、ちづが『お邪魔します』って言うの。いつか直してくれると思ってたけど…5年経っても直んなかったからな。強制的に直す」

「これは命令だ」とか言いながら悪戯っ子のようににやりと笑うあおくん。

茶色の瞳が木漏れ日のように温かな色を灯して、私を見つめる。優しく、労わるように。

——ダメ！！ダメなのに！！

どうしてそんな顔を見せるの？

どうしてそんな優しいことをまるで自分の我侭のように言うの？

どうして、どうして、どうして。

——これじゃあ、あおくんから一生離れたくないって思っちゃうじゃない…！

お願いだから私の居場所をあおくんの傍に作らないで。
私は離れなくてはいけないの。
遠く、遠く、あおくんのいない場所まで。
私という枷の鎖が届かぬ所まで。

あなたという優しい世界に寄り添いはしても、その中に私の居場所を望んではいけないの。

「わかった、ちづ？」

本当は叫びたかった。
そんなこと言わないで、と。
離れることが、そして離れた後の世界が余計に辛くて怖いものになるから、と。

「……うん、わかった。ありがとう、あおくん」

私は、またひとつあなたに嘘を吐く。

きつと離れるまでの僅かな時の中で私はたくさんの嘘を吐くだろう。
私は嘘を吐くのがすごく下手だけど。

優しすぎるあなたをこれ以上縛り続けられないために、精一杯嘘を吐く。

「当たり前のことなんだから、お礼なんていらない。それよりほら、
言ってみ？『ただいま』って」

私は心に誓う。

あおくんの家が私の家だなんて、絶対に思わない。
いや、思っではいけない。

どんなにそれを望んでいても。

「……ただいま」

ねえ、あおくん。

私は今、ちゃんと笑えていますか？

この嘘を隠せるくらい、綺麗に。

『ただいま』（後書き）

大変遅くなりました！！
もう、本当にすいません…；

こんな遅い作品をお気に入り登録してくださっている方々、本当に
ありがとうございます！
これからもしよろしくおねがいします！

恐怖

「あんたたち、そんなとこで何やってんの？」

不意に聞こえた気だるげな声。

その声がした方向、長く続く廊下の奥にある階段の途中に、手摺にもたれかかるようにして立っていたのは、妖艶な美女。

あおくんのお母さんである、陽菜さんであつた。

「あ、陽菜さん！お仕事ひと段落したんですか？」

「まあね。それより、そんなところで突っ立ってないで早くリビングに入りなさいよ。寒いでしょ？」

ふわりと欠伸をしながらゆらゆらと歩いて行く陽菜さんはどこか危なっかしい。

仕事で部屋に籠もりっぱなしでろくに寝てなくてお疲れなんだろう。心配で小走りに陽菜さんのもとへ駆け寄り、その細くとも豊満な体を支える。

「大丈夫ですか、陽菜さん？お仕事お疲れ様です」

「ありがとう、ちづちゃん」

「新作、出来上がったらまた読ませてくださいね！」

「もちろんよ！今回のテーマはね——」

陽菜さんの最新作の話を聞きながら、リビングに入り柔らかなソフ

アーに彼女を座らせる。
ソファアーに体を預けた陽菜さんは、ほう、とひとつ溜息をついた。
本当にお疲れのようだ。

「コーヒーでも淹れますね」

「悪いわね」

リビングに続きで繋がっているキッチンに入り、陽菜さんのために
コーヒーを準備する。

毎日あおくんの家に入出入りしているため、何が何処にあるのかはだ
いたい分かつている。

こういう慣れというのは、後々独り立ちすることを考えると良くな
いことだとは思う。

離れるとき悲しみが大きくなって辛いのは自分なのに。

それでも心のどこかでこの状況を喜んでいる自分はなんて愚かなん
だろう、と考え落ち込み始めたところで背後から大きくて暖かなも
のに包まれた。

ちよつと驚きながらも後ろを見上げるようにして振り返ると、そこ
には不機嫌そうな顔をしたあおくんがいた。

「ど、どうしたのあおくん？」

「『どうしたの？』じゃない。俺を置いていくなんてひどいじゃないか」

「置いていったわけじゃ……陽菜さんが心配で」

「理由はどうであれ、俺を置いていったことには変わりはないだろ」

どんどん不機嫌になっていくあおくんの表情。

でもそれは何だか小さな子供がするような不貞腐れた顔で。
落ち込んでいたにも関わらず小さく笑ってしまった。

「あおくん、拗ねてるの？」

「拗ねてない」

「それじゃ、どうしてそんなこと言っつの？」

昔から拗ねる時だけは子供っぽくなるあおくん。

いつもは落ち着いていて大人っぽい彼からは想像もできないくらい幼くて、どこかわいい。

だからこういう風にされると嬉しくて仕方がない。

「ちづはね、俺の傍にいなきゃだめなんだよ」

不意に今までの不機嫌な表情を消して、まじめな声と顔であおくんが私をまっすぐ見る。

茶色い瞳に揺らめく、得体の知れない炎のような激しい光。

思わず息を止めてしまいそうになるほど、強烈な視線。

「ずっと…ね？」

どくどくと脈打つ私の鼓動。
早鐘を打つその音が耳に響く。
『恐怖』という感情を伴って。

——なんで、なんで私あおくんのこと恐がってるの……？

あおくんに嫌われることを恐れることはあっても、あおくん自身を
恐れたことはなかった。
だって彼はいつだって私に優しい。
悲しくなるほどに、優しいのだ。
恐がる必要なんて、どこにもなかった。

それなのに、私は今日の前のあおくんに怯えている。
その瞳に。

その存在に。

恐れ、怯え、体が動かない。

あおくんが何を言ってるのかさえ、分からない――

「――ちづ、コーヒー冷めちゃうんじゃない？」

暫くの沈黙の後、瞬きをひとつすると、あおくんの瞳には強烈な光の代わりにいつもの木漏れ日のようなやさしい光が灯っていた。そのことに安堵するとともに、あおくんの放った言葉が頭の中に入ってきた。

『ちづ、コーヒー冷めちゃうんじゃない？』

――コーヒー？

「えっ、ああッ！！」

そっだ、私はお疲れの陽菜さんのためにコーヒーを淹れたところだっ
たんだ！！

カップに注いだから早く持って行かないと、冷めてしまう！！

「コーヒー持ってかなきゃ！！」

慌ててコーヒーを入ったカップをのせたおぼんを持ち上げた私を、
あおくんはおかしそうに笑いながら見つめる。
そして何気なく私の手からおぼんを奪っていった。

「あ、あおくん！私持つて行くよ！」

「だめ。そんなに慌てて転んだりしたら大変だろ？」

そう言つてスタスタと歩いて行つてしまつたあおくんを追いかけるようにして、私もリビングに戻る。
何だかすごく申し訳ない気分になつてしまつた。

「はい、母さん。ちづが淹れたコーヒー」

「ありがとう」

陽菜さんの前にコーヒーを置くと、あおくんはその向かいのソファに座つた。

そして私に向かつて「おいで」と微笑む。

つられるようにして隣に座った私を見て、陽菜さんがふっ、と笑みを零した。

「ふふっ、ほんとちづちゃんって可愛いわよね」

「えっ！？そ、そんなことないです！」

「何て言うのかな……そう！親鳥の後をくっついて歩く雛鳥みたいな感じ？」

「えっ、えええ？」

「さしずめ葵が親鳥でちづちゃんが雛鳥ってとこね！かわいいわあ」
「」

朗らかに笑う陽菜さんの言葉に困惑する私をよそに、あおくんは陽菜さんに用意する時に一緒に用意したあおくんの分のコーヒーを飲んでいた。
ついでに自分のも用意してあったので、あおくんに倣ってそれを飲み落ち着きを取り戻す。
そんな私を見てさらに笑みを深める陽菜さん。

「そうやってすぐに葵に影響されやすいところが、親鳥の後を付いて回る雛鳥っぽいよね。まあ、昔からあんたたちはそんな感じだったけど」

「それって私、成長してないってことじゃないですか…！」

思わず、膝の上に置いていた両手をぎゅっ、と握り締める。

私は、一人で生きていかなければならないのに。

昔も今も、何一つ変わらずあおくんに甘えて生きているだけだなんて。

それじゃ、だめなのに…！

「どうしたの、ちづちゃん？バカにしているわけじゃないのよ？」

「あ、いえ……。ただ、ずっとあおくんに頼ってばかりだななんて自分が情けなくて……。自分の将来が心配というか……」

「そんなの気にしなくていいのよ。うちの葵なんかでよければ」

生頼って甘えればいいのよ」

「そうだよ、ちづ。俺がずっと傍にいてやるから、何も心配することはないよ」

私は何も言葉を返せなかった。

ふたりが言う『一生』も『ずっと』もやってこないと……いや、やってきてはいけない未来だということを知っているから。だからここは曖昧に笑ってやり過ごすしかない。

「ああ、ごめん。電話だわ」

私が下手くそな笑みを浮かべようとした時、タイミングよく陽菜さんのケータイが鳴った。

彼女のお気に入りの緩やかなピアノ曲の着信音を頼りに、ケータイを取った陽菜さんを眺めつつ、私は密かに安堵の溜息をついた。誤魔化すための笑みを浮かべずにすんで、ほっとしたのだ。

「——ええ、わかったわ。大丈夫よ。気をつけて来てね」

短いやり取りの後、陽菜さんは通話を終えた。
そしてあおくんに向かってにっこりと微笑む。

「葵、あんたこれから特に何も無いわよね？」

「まあね」

「じゃあ、悪いけど一時間後に駅に行つてちょうだい」

「何で？」

何とはなしにふたりの会話を聞きながらコーヒーを飲んでいた私は、

陽菜さんの次の言葉に思わずカップを落としそうになった。

「蘭ちゃんがうちに来るから、駅まで迎えにいったあげてほしいのよ」

——らんちゃん……？

『あんたがいるから、葵は誰とも恋愛ができないのよっ！』

フラッシュバックする言葉と映像。

ガッン、と殴られたような衝撃とともに蘇る記憶。
忘れもしない、あの日のもの。

『あんたさえ、あんたさえいなければ…!』

そう言って、つり目がちの大きな瞳を潤ませて。

けれど絶対に涙を零さずに気丈に言葉を吐き出して。

烈火のごとく怒っているのに、どこか儚く苦しげだったあの子。

「蘭ちゃんが、来る…?」

私は、どんな顔をして会えばいいのだろうか。

『私』という存在にずっと胸を痛めてきた、あの子に。

恐怖（後書き）

今回は（自分の中では）早めの更新です^^

お気に入り登録してくれてる方々が増えていてびっくりしました。
本当にありがとうございます！

よければ感想なんかのほうもよろしくお願いします。

恐怖の正体

あおくんが蘭ちゃんを迎えに行くまでの1時間、私の心の中はずっとざわついたままだった。

時折投げかけられる陽菜さんとあおくんの言葉に相槌や笑みを返したりしていたけど、その言葉の意味はまったくといっていいほど頭に入ってこなかった。

そんな心境を何とか取り繕おうと必死でいつも通りなふりをしていたけど、陽菜さんもおくんも鋭い人だから私の様子がどこかおかしいと気がついていたかもしれない。

でも、二人は何も私に聞かなかった。

それが二人の優しさだと分かっていて、私はそれに甘えた。

今は、これからやってくる蘭ちゃんのことでも心も頭もいっぱいはいだった。

「それじゃあ、そろそろ行ってくるよ」

ちらりと時計を確認したあおくんがソファから腰を上げた。
その言葉に心臓が大きく鼓動を打つ。
引きつりそうになった顔をどうにか笑みの形に整え、あおくんを見上げる。

「いつてらっしゃい」

「気をつけるのよ」

そう言った私と陽菜さんに微笑んでから、あおくんは玄関へと向かって行く。

私は去っていくその背中を怯えた思いで見つめた。
できることならあおくんに行ってほしくない。
蘭ちゃんを連れてきてほしくなんかない。

私は蘭ちゃんに会うのが、恐い。

「ちづちゃん、そんなに寂しいの？」

「え？」

不意にかけられたその言葉に振り向くと、悪戯な笑みを浮かべた陽菜さんと目が合った。

いつも思っただけど、あおくんは陽菜さんとよく似ている。
繊細で「綺麗」という言葉が当てはまる陽菜さんの美貌をあおくんは見事に受け継いでいるのだ。

「葵がいなくなったった方をずっと見てるから、寂しいのかなって思っただよ」

くすくすと笑いながら言う陽菜さんの言葉で、とっくに去っていったあおくんの背中を追うように、ずっと玄関の方向を無意識に見ていたことに気付かされた。

「あ、いや、そういうわけじゃ……!」

私があおくんが去っていった方向を見ていたのは、蘭ちゃんを連れてきてほしくないという恐れがあったからだ。
陽菜さんの言うような寂しさからではないのだけど、でもそういう風に言われると恥ずかしくて知らず頬が熱くなる。

「ふふっ、そんなに照れなくなってるのよ!ちづちゃんが葵のこ
と大好きなのは知ってるんだから。親戚とは言え彼氏が女の子を迎えに行くなんて彼女としては不安になるわよね」

「ひ、陽菜さん!？」

「大丈夫、大丈夫。葵はちづちゃん一筋よ!ちづちゃんは彼女としてどーんと構えて待ってればいいのよ!」

何だか話が思わぬ方向に進んでいる…!

もしや、陽菜さんはあおくと私が付き合っていると思っているのだろうか?

そんなこと有り得ないのに…!

「あの!陽菜さんつてもしかして私とあおくんが、あの、その…つつつつつつつつ付き合っていると思うてるんですか!？」

「え…?」

「もしそうなら、それは誤解です!」

どこでどう陽菜さんが勘違いしたのかは分からない。

でもきつちりと否定しておかないと。
私なんかあおくんの彼女になるなんて、そんなことがあっていい
はずがないのだから。

「私とあおくんは付き合ってますん！」

陽菜さんが言うように、私はあおくんのことが大好きだ。
ずっと傍にいたいと心の底から思うほどに。

けど昔のことであおくんを縛り付けてしまった私はそれを望んでは
いけない。

きっと私が望んでしまえば、優しいあおくんは叶えてくれるだろう
から。

私に恋愛感情なんて持っていないなくても、それを上手く隠して私を恋
人にしてくれようとするだろうから。

そんなこと、絶対にあつてはいけない。

あおくんのためにも、そして私自身のためにも。

「え、でも……」

戸惑った様子の陽菜さんは何か言おうと口を開きかけたが、すぐに閉じた。

そして暫く考え込むように黙ってしまった。

どこことなく重い雰囲気が漂って、心許ない気持ちになってくる。

「…………そう。二人は付き合っていないのね。いつも一緒にいるから付き合ってるのかと思ってたわ」

苦笑しながらそう言う陽菜さんに、申し訳なさが沸いてくる。

私があんな約束をしてあおくんを縛ってしまったから、こうしてたくさんの人に誤解や迷惑をかけてしまうのだ。

本当に、私はなんてことをしてしまったのか。

「……あおくんが私の傍にいてくれるのは約束をしたからです」

「約束？」

「……はい。とても身勝手な約束を、私があおくんにさせてしまったせいなんです……」

あの時、私は自分のことしか考えていなかった。
周りなんてまったく見えていなかった。
だから、きつと、たくさんの人を悲しませた。

「言い訳にしかないけど、でもっ、こんなっ、こんなことになるなんて思わなかったんですっ……！約束をしたあの時は……っ！」

とにかく助けてほしかった。
誰かに縋りたかった。

たったひとりになることが、ひどく恐ろしかった。

だから私はあおくんに甘えてしまった。

自分で立ち直らなければならなかったのに。

弱い私は、自分の思いばかりをあおくんに押し付けてしまった。

それがどんなに身勝手に罪深いことなのか考えもせずに。

『あんたさえ… あんたさえいなければ…！』

だからあの子——蘭ちゃんが言ったことは正しかった。

私が、私だけが残ってしまったのがいけなかった。

こんな周りの人を苦しめるだけの私なんて、残ってはいけなかったのだ。

彼女は本当はちゃんと知って受け止めなければならなかった身勝手な私自信を暴きだした。

だけどそれは一番知りたくなかった醜い私自身の姿でもあった。

だから私は蘭ちゃんが恐い。

彼女の前に立つと、自分を守るためにおおくんを犠牲にしていたという、醜い私自身を晒し出されてしまうような気がするから。

「ちづちゃんっ！」

肩を揺すられ、はっと我に帰る。

気がつけば私は両手で顔を覆って俯いていた。

ゆっくりと顔を上げれば、向かい側に座っていたはずの陽菜さんがすぐ傍で膝について私の顔を覗き込んでいた。

「大丈夫？急に黙り込んで俯くから……」

「……大丈夫、です。すみません」

「もしかして具合が悪いの？…顔色があんまりよくないわ」

心配そうな表情の陽菜さんが両手でそつと私の頬を包んでくれる。
温もりと共に感じる陽菜さんの手の感触が、母の手の感触と重なる。
慈しむように包まれた懐かしい感触が遠い日の記憶のを一瞬思い出させる。

それはもう二度と繰り返すことのできない日々の記憶。
失いたくなかった、愛しい大切な記憶。

「…すみません、陽菜さん。何だか具合がちよつと良くないみたいなので今日は帰ります」

「うちに泊まっていきなさいよ。ちづちゃんの部屋あるんだから」

「…いえ、今日は家に帰ります。変なこと話しちゃってごめんなさい」

「それはいいんだけど…」

陽菜さんの手が頬から離れていくことに、寂しいようなほっとする
ような妙な気持ちを抱きつつ、ソファアールから立ちあがる。
ふと窓の外を見れば、もうすっかり日が暮れていた。

「それじゃあ、帰ります。おじゃましました」

「…せめて夕飯だけでも食べていけばいいのに。もうすぐ美雨^{みう}が帰
ってくるから、そうしたらすぐに夕飯作ってくれるわよ？さっき蘭
ちゃんが来るってメールしたから、きっと今晚は豪勢なもの作って
くれるわ」

美雨というのは、あおくんのお姉さんだ。

私は『みーちゃん』と呼んでいる。

家事全般が不得意な陽菜さんに代わって、立花家の家事の全権を握
っているみーちゃんの料理はプロ級の腕前でいつもなら喜んでごち
そうになるのだけど、私はとにかく蘭ちゃんにあうのが恐ろしかっ
たので遠慮することにした。

何より、蘭ちゃんのことを聞いて色々と思い出したせいなのか、あ

まり食欲がない。

「せつかくですけど、今はあんまり食欲ないんです。本当にごめんなさい」

「……そう。本当に大丈夫？」

「はい。今晚は家でゆっくり休んでいます」

そう言ってお辞儀をしてから、あおくんの家を出てすぐ隣にある自分の家へと帰る。
徒歩1分もかからないこの距離。
けど、あおくんの家と私の家の間にはきつと超えられない距離がある。

「ただいま……」

玄関のドアを開けた向こう側。
すべてを飲みこむような闇だけが広がる。

『おかえり』と言ってくれる人は、誰もいない。

恐怖の正体（後書き）

ものすごいお久しぶりの更新です…。
毎度毎度、遅くて本当にごめんなさい；

こんなのろのろとしか進まないお話を読んでくださっている全ての方に心から感謝しております！

ちゃんと完結させられるよう、下手でのろまな作者ではありますが頑張りたいと思いますので、どうぞこれからもよろしくお願いいたします＞＜

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5007k/>

私という名の枷、あなたという名の檻

2011年7月23日07時56分発行